



松

江城物語と名付けた四編は、その子の特性を考慮して勧める他のネタと異なり、自由にしてくれ、とだれにも公開した。だけれども選ばれないという確率もありはしたが、幸いそういうことはなく、しばらくすると「次の稽古で○○やります」などの連絡が入るようになった。子どもたちにいらぬ気を遣わせているのではないかという気がしないでもないが、そこはおくびにも出さない。

落語教室を始めた時からオリジナルの演目もちらりと漠然と思っていたが、歴史館からの注文を受けるという、思わぬところからきっかけが与えられ、願いがかなうこととなった。ただ、演者と聴衆から愛されるネタになるかという根本の問題があるのだが、それは高座にかけてみないとわからないし、並大抵のことではないと覚悟はしている。少なくとも、作品の練度をあげていく足場はできたのだから、それだけでとてもありがたい。

年明けから、寄席や稽古で子どもたちがかけ始めた。子どもたちのしゃべる様子やお客さんの反応から気づかされることは実にたくさんあって、それがとてもおもしろい。ウケるはずのところも反応がなかったりすると、その理由が思い当たり、なるほどそういうことかと納得する。お客さんや子どもたちに一つ一つ



百号に寄稿いただいた方の中で、次の号からも文章を寄せてくださった方がおられる。書くことよって裡にある何かが刺激され、次から次へと湧き出て来たのではないかとと思う。

その中で、若い頃から文章を書き続け、当時は図書館で仕事をしておられる方は、本にまつわることを連載、長く教育現場におられた方は教科書問題について数回寄稿された。そして、独自の教育理論を持ち、教育のみならず様々な問題を積極的に発言している方は、最後となる文章を夕焼け通信に届けてくださった。今に至る社会全体の問題を様々な観点から考察し、綴られたのだ。その胸の裡にあるのは何百倍、いや何万倍もの思いだろうと察せられる。亡くなられた後で私たちが目にするようになった文章を掲載する。

『子どもたちは地球の閉塞状況を肌で感じています。イデオロギーの崩壊・教育の崩壊・環境の崩壊：すべての崩壊現象を身体で感じながら生きています。管理を強化すれば教育が徹底する：と考えるのは、教育の放棄につながる思想です。自主・自律・自立・民主・教育の主人公は子ども：どれだけ御託を並べて言ってみても、それがウソであることは、子どもが一番よく知っています。教師が「子どもは競争させなすぎや勉強なんかしませんよ！」という信念に支えられている限りは：ね。』

その方が皮肉を込めて書かれた蛙の安楽死という話。いきなり熱い湯に放り込まれたら蛙は飛び出してしまうが、水からだんだんに温かくしていくと、気づかないまま死んでしまうという。それは、私たちを取り巻く様々な事柄を象徴している。地球温暖化の警鐘が鳴り続けているにもかかわらず、人々はその日を快適に過ごすために電気も水もふんだんに使い続けている。安くて丈夫だということに暮らしのありとあらゆるところで使われているプラスチックが今や地球環境に様々な悪影響を及ぼしている。有名大学への合格、大企業への就職などで将来が約束される社会ではなく、なっているにもかかわらず、お受験に熱を注いでいる現実などなど。

この発信を改めて重く受け止めた。しかし、同時に三十年を経て何も変わらない、いやさらに深刻になっていることにも気づいてしまう。この現実には私たちがどう対峙していけばいいのだろうか。

添削してもらっているようなものだ。これから子どもたちそれぞれのアイデアも加わってこようし、当分楽しみが続くそうだが、と今は樂觀しかしていない。書き直しながらつくづく思うのは、古典落語の完成度の高さである。さりげない情景描写や小さなセリフの一つ一つに必然性がある、客のイメージが濃んだり脇へ流れたりしないよう細心の工夫が積み重なって、オチへと至る。まさにたくさんの演者で作り上げた知恵の集積だ。

さて、春先から始めた小泉八雲の怪談、夏から始めた出雲弁落語、冬からの松江城物語、こうして並べてみるといずれも松江ゆかり、よそでは決して得られぬものだから、三つをまとめて何か名付けてみたくなつた。セット、詰め合わせ、など思い浮かんだが、どれも言葉におもしろみがなく、あれこれ考えた末に「松江嘶乃三種盛(まつえはなしのさんしゅもり)」とした。すぐに三色井のような絵がかんできたので、どんぶりの中でそれぞれの登場人物が勝手にしゃべっているようなイメージを伝えて、イラストを描いてもらった。

今はまだあれこれいじっている最中だが、そのうちチラシにして、みなさまにお披露目できると思う。ぜひ召し上がれ。

30代フリーター トランプは移民やトランスジェンダーなどマイノリティーに不利な政策を推し進め、企業の中にはDEI（多様性、公平性、包摂性）への取り組みを後退させているところが相次いでいる。

年金生活者 トランプやその支持者らは、少数者の自由の拡張が多数者の自由を縮小するというゼロサムを前提にしている。原理的には少数者の自由の拡大は多数者の自由も広げるはずだし、それがあらまほしい姿だが、現実には富の稀少性がそれを妨げている。

30代 資本主義は富の稀少性の縮減を加速してきた。そのまま進めば稀少性はゼロになる、とジイさんは言っていた。

年金 そうなると、競争は不要になる。資本主義は駆動力を失い、心臓停止に陥る。

それを阻む力のひとつがインフレだ。デフレが稀少性の縮減を促すのに対し、インフレはそれにブレーキをかける。両者は長周期の呼吸作用のように交代を繰り返すことによって、資本

動し始めた。

30代 パイは大きくなっても、やはり限られている。配分をめぐるマジョリティーとマイノリティーのせめぎ合いは終わらないのではないか。

年金 だから、パイの大きさは過剰にならなければならない。だが、資本主義が続く限りパイが有り余ることはない。さっきも言ったとおり、この経済システムはパイの稀少性を縮減し続ける一方で、それを抑制し続けてもいるからだ。稀少性の縮減は利潤の源泉であるイノベーションの結果であり、縮減の抑制はシステムを駆動する競争を維持するためだ。

パイを増やしつつ、増え過ぎないようにする資本主義の運動を突き崩すものとしてマルクスは生産力の発展を想定した。

「ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的、といつても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、形態の最後

主義を延命させている。

東西冷戦の終結から続いたデフレは企業にイノベーションを強い、多様な生産と多様な消費を出現させた。それがマイノリティーを尊重する多様性の思想をあと押しした。その勢いを削いだのが、新型コロナとロシアのウクライナ侵略が招いたインフレだ。トランプはその流れに乗っている。

30代 少数者、多様性を尊重する考え方はいつから広がりだしたんだ。

年金 イマニユエル・ウォーラースタインによれば、彼の言う「1968年の世界革命」が女性の解放や人種の平等、少数民族の尊重など「少数者の自由」を求める運動を活発化させた。この「世界革命」が西側陣営に対してだけでなく、それと対立する東側陣営に対しても、さらに西側諸国の左派政党など伝統的な反体制運動に対しても異議を唱えたからだ。それらの既成の勢力はいずれも、マジョリティーである労働者の味方を標榜していても、女性や黒人、少数民族などマイノリティーの要求にこたえることには熱

いものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対的關係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。だからこの社会構成をもって、人間社会の歴史はおわりをつげるのである」（『経済学批判』大内力ほか訳）

心でなかった。

30代 そんな世界革命があったのか。年金 各国で同時多発的に起きたフランスの5月革命、日本の全共闘運動、アメリカのベトナム反戦運動、チェコスロバキアの「プラハの春」などをひとつの世界史的な転換点としてとらえた言い方だ。

1968年は日本が高度経済成長のピークを迎え、世界第2位の経済大国となった年だ。先進諸国の国民は貧困のくびきから解放されつつあった。個人は自立意識を強め、国家に対しても、反体制運動に対しても、指導者の言いなりになるのではなく、自らの感性にしたがって行動するようになってきた。それが国家や既存の左派勢力に対する異議申し立てとなって噴出した。

マイノリティーを重視する運動が発火になったもうひとつの要因は、それまで切り捨てられてきた少数者を養えるだけの社会の豊かさを富の稀少性の縮減がもたらしたことだ。当然の分け前を求めて、マイノリティー自身が行

マルクスの時代は資本家と労働者の階級対立が「敵対的關係」の中心をなしていた。現在では、マジョリティーとマイノリティーとのゼロサムゲームをそれに含めることができる。そうした関係は「ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力」によって解体されるとマルクスは考えた。

現在その「生産諸力」の発展に該当するものはあるだろうか。ジェレミー・リフキンはモノのインターネットの発展を考えた。それが3Dプリンターなどと連結されると、限界費用がゼロに近づき、個人はタダ同然で自分のほしいものをつくったり、手に入れたりできるようになる、と（『限界費用ゼロ社会』柴田裕之訳）。

だが、私たちの日々の生活からはそんな未来を予感することはできない。それでも「敵対的關係」をなくすほどの「生産諸力」を想定するとすれば、モノのインターネットも、いま急発展しつつあるAIも、まだその一部に過ぎないと考えるほかない。

ニュース日記 956
中村 礼治

多数者の自由と少数者の自由